

白山の自然誌 17

イワヒバリの生態



1997年3月

石川県白山自然保護センター

はじめに

イワヒバリは一般にはなじみのない鳥かもしれません。夏は高山にすみ、冬も山の中の深い谷間などにおいて、人里へ降りてくることはありません。また全身褐色が目立たない色をしていることも、鳥としてあまり印象を与えないかもしれません。しかし、夏の高山へ登山する人たちにはきっとよく知られた鳥の一つに違いありません。山頂付近の岩場や砂礫地などよく目につくところにおいて、近くを通ってもあまり逃げません。またヒバリに似た大きな声で鳴くことでもその存在がよくわかる鳥です。

この鳥はライチョウと並んで日本の高山帯を代表する鳥です。かつてはライチョウがいたことがわかっている白山の高山帯ですが、今は絶滅してしまいました。そのことは、同じような環境にすむイワヒバリにとっても、その危険性があることを示しています。

白山自然保護センターでは平成5年度から3年間、環境庁委託調査「国立公園管理方針検討調査－高山帯小動物調査－」として白山でイワヒバリの分布や巣作りの様子などを調べるとともに、公園利用者との関係についても調べました。その中で明らかとなったことを紹介します。

も く じ

イワヒバリ	
体の特徴	2
イワヒバリを調べる	3
分布	
世界分布	4
日本分布	4
石川県での分布	6
一年間の生活	
春 繁殖地へ移動	7
夏 群れでナワバリをつくる	8
梅雨の中で抱卵、育雛	9
巣立ち後	10
秋冬 山を下り深い谷の中で過ごす	11
食べ物と採食場所	13
営巣場所	15
繁殖期の生息環境と個体数	
生息環境	17
生息個体数	18
イワヒバリの保護のために	
イワヒバリを観察しよう	19
注意したいこと	19
高山帯の生き物の保護	20
おわりに	21

イワヒバリ

体の特徴

体はスズメより大きく、頭から胸にかけては灰色、翼や尾は黒褐色、他は全体に褐色の地味な鳥で雌雄は同じ色で外見からの区別はできません。くちばしは細く尖り、主に昆虫や草本の種子を食べます。大きなよく通る声でキュルリ、キュルリ、キュルリなどとさえずり、地鳴きはキュルキュルなどと聞こえます。

若鳥は親鳥に比べると腹や背の褐色が淡く全体的に色がくすんでいます。また巣立ったばかりのころは、親鳥に餌をねだるときジェジェン、ジェジェンと聞こえる声をだします。

イワヒバリの属するイワヒバリ科は、1属12種あるいは13種に分類される小さなグループで、日本にはイワヒバリとカヤクグリが生息し、まれにヤマヒバリが渡来します。カヤクグリは白山には数が多く、おもにハイマツに止まっているのが見つかります。声が違うので鳴けば間違ふことはありませんが、体色が似ていることと、イワヒバリの見つかると雪溪の上にもよく現れるので、区別するには十分な注意が必要です。



成鳥



若鳥

イワヒバリを調べる

繁殖地が高山という環境的に非常に厳しいところであるため、イワヒバリの研究はごくわずかしかなかったが、近年乗鞍岳などにおける中村雅彦氏等の精力的な研究により、その生態が分かってきました。

イワヒバリは雌雄が同じ体色をしている上に群で行動することが多いため、一羽一羽の鳥の区別がつくようにしなければ正確な行動はつかめません。そこで捕獲許可の手続きを済ましてから、イワヒバリを網で捕獲し、足にプラスチック製のカラーリングをつけます。一本の足に3個付けることで、その色によって個体の名前とします。例えば下から黄緑色、黄色、赤色の順にリングが付いていれば、その鳥はキミキアカと呼ぶといった具合です。このように個体識別をしてから、望遠鏡や双眼鏡でそれを確認しながら各個体を追跡して調べるのです。この方法で今まで分からなかった行動が次々と明らかとなっていきました。繁殖地での行動だけでなく、リングの付いている個体が冬季に発見されることで、乗鞍岳出身のイワヒバリの越冬地のいくつかが明らかとなるなど、画期的な発見がなされました。



カラーリングの標識をつけて個体識別をする

分 布

世界分布

イワヒバリの分布域は広く、ヒマラヤやアルプスをはじめとするユーラシア大陸のほとんど全ての山脈の高山帯に生息しています。山脈ごとに隔離分布しており、以下の9亜種に分けられています。

イワヒバリの亜種と分布

亜種名	主な分布地域
<i>Prunell collaris collaris</i>	南西ヨーロッパ、北アフリカ
<i>P. c. subalpina</i>	東南ヨーロッパ、クレタ島
<i>P. c. montana</i>	コーカサス、南イラン、北イラク
<i>P. c. rufilata</i>	タジク共和国、アフガニスタン
<i>P. c. whymperi</i>	西北インド、西インド
<i>P. c. nipalensis</i>	東ヒマラヤ、東南チベット
<i>P. c. tibetana</i>	東チベット、北東中国
<i>P. c. erythropgia</i>	アルタイ山脈、中国、韓国、日本
<i>P. c. fennelli</i>	台湾

分類はHoward & Moore (1991)による

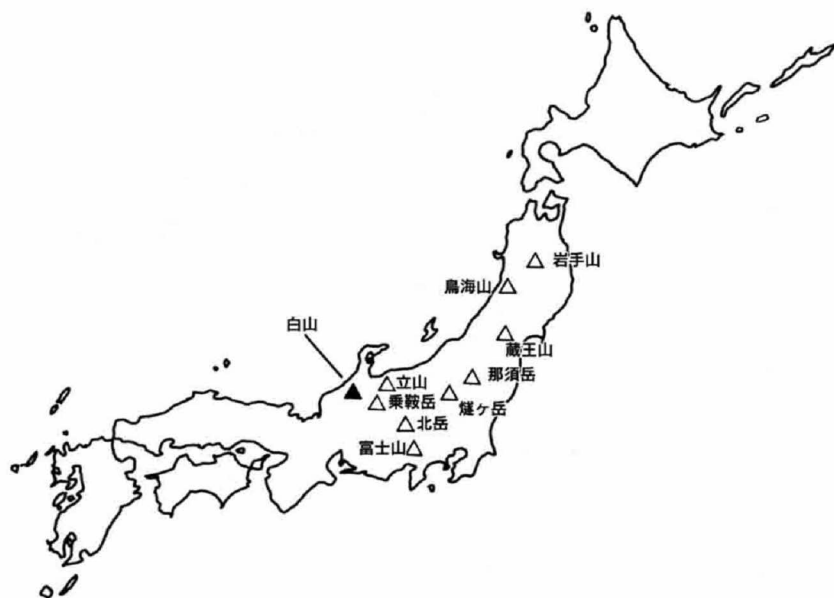
日本分布

日本では北アルプス、南アルプス、中央アルプス、八ヶ岳、富士山、白山など中部地方の高山帯で繁殖が確認されており、関東地方では日光白根山、那須岳など、東北地方では岩手山、蔵王山、月山、鳥海山、燧ヶ岳などの高い山でも夏季に生息が確認され繁殖しているもようです。北海道の大雪山系でも観察記録がありますが、繁殖の確認は得られていません。この中で、白山は繁殖分布の西限にあたります。

冬季の生息地としては、関東山地、日光、富士山麓、妙高山麓など多くの場所が知られています。特に栃木県足尾町、山梨県河口湖町、愛知県豊根村、奈良県川上村では、繁殖期に乗鞍岳でカラーリングを付けた個体が来ていることが分かっています。



乗鞍岳のイワヒバリの生息環境

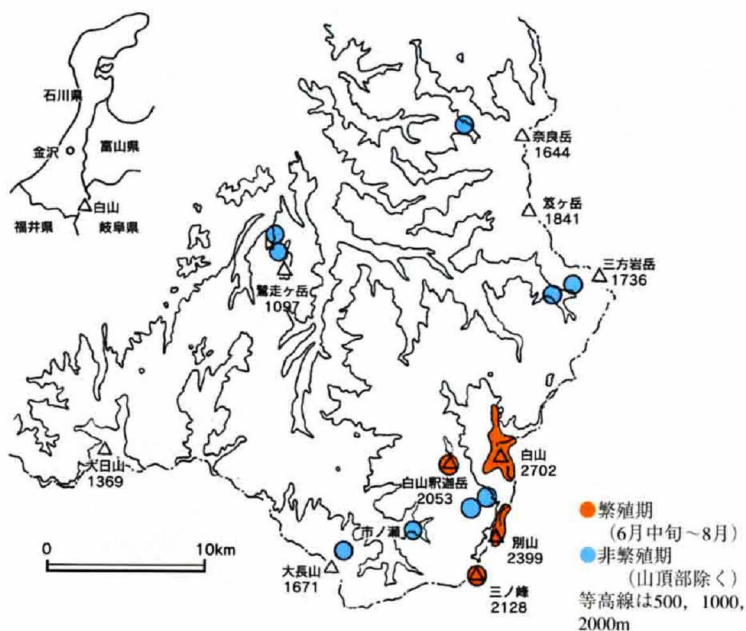


夏期にイワヒバリの分布する主な山岳

石川県での分布

夏季には白山の最高峰である御前峰（2702m）周辺を中心に、北は清浄ヶ原付近、南は三ノ峰までの範囲の標高がおよそ2000m以上に分布しています。この範囲全てに生息しているわけではなく、岩場、砂礫地、風衝植生、雪田植生など、植物の生えていないところか、背の低い植物のあるところに生息しています。

秋から冬には、白山麓の谷の中で生息しており、河内村直海谷（奈良岳西方）、鳥越村鷲走谷（鷲走ヶ岳北方）、吉野谷村蛇谷（三方岩岳西方）、白峰村市ノ瀬の標高500m～1300mくらいの岩場のある急斜面に見つかっています。また春にも砂防新道沿いや大長山の雪の消えた岩場などに見つかっています。



一年間の生活

春 繁殖地へ移動

白山の室堂が開き、春山の登山シーズンが始まるのは5月1日です。5月の白山はまだ深い雪の中で、ところによっては10mを越える積雪が地表を覆っています。しかし谷の中などの急斜面や風当たりの強い山頂付近は、雪が崩れたり吹き飛ばされたりして地表が出ています。雪の深い砂防新道の尾根を上っていくと、中飯場（標高1500m）から甚之助避難小屋（標高1980m）付近にかけて、上空を鳴きながら飛んでいくイワヒバリの数羽の群に出会うことがあります。イワヒバリは尾根の両側に深く切れ込んだ別当谷と甚之助谷の雪の消えた崖地を行き来したり、また急斜面で雪の中にぽっかり開いた地面に降りて、そこで餌を探しているのです。これらの場所で繁殖期にイワヒバリを見ることはないこと、またこの時期に白山の山頂ではごくわずかの個体しか見られないことから、この砂防新道沿いで出会うイワヒバリは、繁殖地である高山への移動の途中と考えられます。

同じ時期の記録として、石川福井県境の大長山の標高1500m付近の岩場があり、これも繁殖地への移動の途中と考えられます。おそらく他にも、白山の中腹の谷の中などの雪の消えた岩場に見つかると思われます。

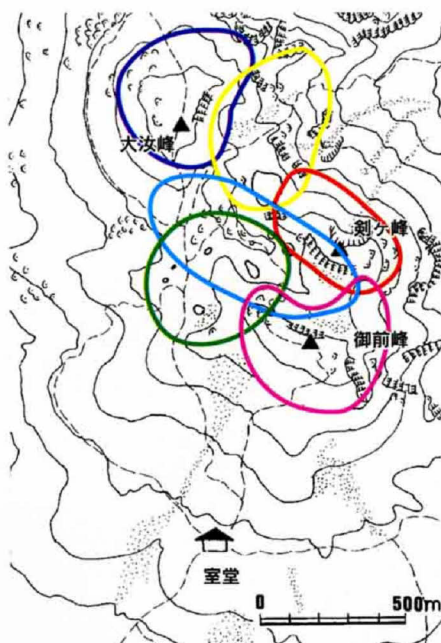


白山の山頂へもどってきてさえずるイワヒバリ

夏 群れでナワバリをつくる

繁殖地である高山に全てのイワヒバリが到着するのは6月上旬以降のようです。そこでは雌雄はほぼ同数の6羽から8羽くらいで群れを作り、進入個体を追い払うナワバリを作ります。雌たちはこのナワバリの中に、各自の巣を防衛する小さなナワバリを分散してもちますが、採食や交尾は群れのナワバリの中で行います。白山でも、カラーリングで個体識別のできたイワヒバリの行動追跡で、山頂部の御前峰、大汝峰、剣ヶ峰周辺に一群6～8羽で合計6群いることが分かりました。それぞれの群れの行動圏は図のような範囲となります。

多くの鳥類（90%以上）は雌雄一羽ずつで番を作って繁殖するのですが、イワヒバリは雄も雌も数回にわたり同じ群の中の異なる個体と交尾する乱婚という少し特殊な繁殖の形をとります。



白山山頂部における群れの行動圏分布

梅雨の中で抱卵、育雛

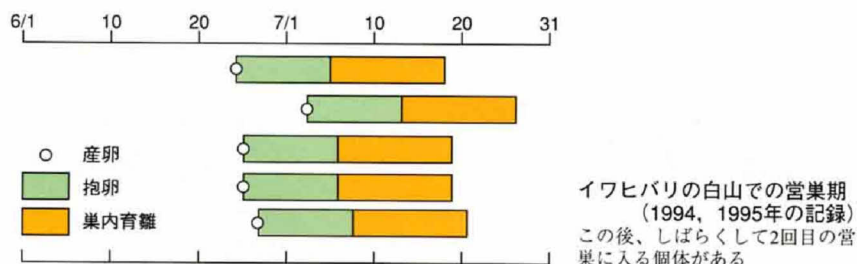
イワヒバリの産卵数は2～4個で、雌だけが抱卵し約12日で孵化します。巣内で雛を育てる日数は約14日で、卵を産んだ雌以外に群れの中の複数の雄が餌を運んできます。また雄は一つの巣だけでなく、同じ群れの中の他の巣の雛にも餌を運びます。一般の鳥類では雌雄の1羽ずつで繁殖活動を行うところを、イワヒバリではこのように一つの群の中で共同して繁殖活動を行うことが分かっています。

実際、白山でも1羽の雌が複数の雄に対して交尾を要求する行動をとったり、個体識別された2羽の違う雄が同じ巣の中の雛に餌を運んでいるところが観察されています。ただし、繁殖期に巣立ち雛以外に親鳥を毎年1～2羽しか見たことがないところもあるので、共同繁殖だけでなく2羽だけで繁殖することがあるのかもしれませんが。今後の調査で確認が必要です。

巣作りや日数のほは分かっている雛の観察など、いくつかの繁殖に関する記録から判断すると、白山でのイワヒバリの繁殖時期は次のように考えられます。巣作りは6月上旬から中旬にかけて、産卵は6月20日過ぎから7月初め、雛が孵化するのは7月上旬から中旬、巣立ちは7月下旬です。ちょうど梅雨の最中に、巣の中で卵を抱いたり雛を育て、梅雨が明ける頃に巣立っていくのです。



育雛中の親鳥 <N>



巣立ち後

7月下旬になり梅雨が明けるとたくさんの方が白山に登ってきます。巣立ったばかりの雛はほとんど人を恐れないことから、山頂周辺のお池めぐりコースの歩道沿いなどでは、ごく近くにいるのをよく見かけます。

巣立った雛はすぐに一人立ちできず、しばらくは親鳥に餌をねだり運んでもらいます。やがて親鳥の後を追いかけてながら餌をもらったり、自分でも餌を探ることを覚えていきます。親鳥の巣外での育雛は約13日間で、その後2回目の繁殖に入る個体があります。一方一人立ちした若鳥は、単独であるいは若鳥どうして群れを作って生活しているようです。



若鳥の群れ <O>



雪溪の上で虫をついばむ若鳥

❶ 秋冬 山を下り、深い谷の中で過ごす

9月15日に巣立った若鳥に餌を与えている親鳥が観察されているので、2回目の繁殖が終わるのは9月中旬以降のようです。この頃になると、7～8月にイワヒバリが普通に見られた山頂周辺で、姿を見かけることはごく少なくなります。さえずらなくなり静かになっていることも一因ですが、繁殖地である山頂付近を離れ始めているのが主因です。10月上旬にも、一部は山頂付近に残っているのが見つかっていますが、やがて白山の、あるいは他の山の中腹から麓へ移動していきます。

10月上旬に別当谷（砂防新道）や大白水谷（平瀬道）で、また10月下旬に飛騨地獄谷（展望歩道）で、いずれも谷の最上部の沢すじの砂礫地や枯れ草のなかにいるのが見つかっています。また11月から12月には吉野谷村蛇谷や鳥越村鷲走谷、河内村直海谷で見つかっています。標高は約500m～1300mで、いずれも山の中腹の岩場や崖地の多い急斜面です。そこでは単独あるいは群で、地上

に落ちている餌を食べていました。同じ谷で繰り返し記録されていることや、越冬地として知られる栃木県足尾などの生息環境と似ていることから、これらの場所で冬を越しているものと考えられます。

草が枯れて地面が出ており、また岩場が多く夏の高山の生息環境と似ていることと、急斜面のため積雪の多い冬季も雪崩が起こる場所で地面が出ていることが多く、秋に落ちた草の種子などの餌を見つけやすいことが、イワヒバリをそこに引きつけているのではないかと考えられます。繁殖期に比べると互いの結びつきは弱いものの、全体としては群れで生活しているようです。



鳥越村鷲走谷の生息地（12月上旬）



吉野谷村蛇谷、白山スーパー林道の法面での採食（11月下旬）

食べ物と採食場所

イワヒバリは雑食性で、夏季は小さなハムシ、ガの幼虫、ハエ、アブなどの仲間の昆虫を、冬季は植物の種子を主に食べています。

イワヒバリの行動を調べるため、餌場を設けてその餌に集まってくる個体を捕獲して個体識別用の足輪を付けようとしたのですが、乗鞍岳では簡単に集まっていたのに、白山ではなかなか餌場に来ませんでした。前々からの観察で白山では残雪の上で昆虫をたくさん食べていることが分かっていたので、このことと関係があると考え、餌場への出現状況や餌場以外での採食状況を調べ、また雪の上の昆虫を6月と7月に2つの山で調査して比較してみました。

その結果、乗鞍岳のイワヒバリが餌場を頻繁に利用し、雪のない砂礫地などで採食していたのに対し、白山のイワヒバリは餌場をあまり利用せず、方々にある残雪の上で昆虫を食べていることが分かりました。そして雪の上の昆虫の

白山と乗鞍岳のイワヒバリ生息地の雪渓上で観察された昆虫類

目	分類 科	6月		7月		計
		白山	乗鞍岳	白山	乗鞍岳	
カメムシ	アブラムシ	156 (70.6)	97 (87.4)	8 (20.5)	14 (58.3)	275 (69.6)
	キジラミ	22 (10.0)	5 (4.5)	1 (2.6)	3 (12.5)	31 (7.8)
	ツノカメムシ	1 (0.5)		4 (10.3)		5 (1.3)
	メクラカメムシ			1 (2.6)		1 (0.3)
	アメンボ			1 (2.6)		1 (0.3)
	不明			2 (5.1)		2 (0.5)
アザミウマ	アザミウマ			1 (2.6)		1 (0.3)
アミメカゲロウ	ヒメカゲロウ			4 (10.3)		4 (1.0)
コウチュウ	ハネカクシ			3 (7.7)		3 (0.8)
	不明			1 (2.6)		1 (0.3)
ハエ	ガガンボ	1 (0.5)		3 (7.7)	1 (4.2)	5 (1.3)
	ハナアブ			3 (7.7)		3 (0.8)
	ケバエ	6 (2.7)				6 (1.5)
	不明	7 (3.2)	5 (4.5)	3 (7.7)	5 (20.8)	20 (5.1)
チョウ	不明	4 (1.8)				4 (1.0)
トビケラ	不明	2 (0.9)	1 (0.9)	1 (2.6)		4 (1.0)
ハチ	ヒメバチ	4 (1.8)	2 (1.8)	1 (2.6)		7 (1.8)
	アリ			1 (2.6)		1 (0.3)
	不明	18 (8.1)	1 (0.9)	1 (2.6)	1 (4.2)	21 (5.3)
		221 (100.0)	111 (100.0)	39 (100.0)	24 (100.0)	395 (100.0)

(Nakamura & Ueuma 1996より)

各データは50cm×50cmの調査区2個分の合計個体数と百分率、調査日は白山1994年6月10日、7月24日
乗鞍岳は1994年6月12日、7月25日。ただし、これら全ての種類をイワヒバリが食べているとは限らない。

量は、表に示したように白山の方が乗鞍岳よりはるかに多いこと、種類としてはアブラムシ類が大部分をしめており、高山帯で発生したものではなく、山地帯や亜高山帯の種類であることが分かりました。これらの昆虫は上昇気流によって運ばれてきたものと考えられ、また低温のため、ほとんどが動きが鈍っていました。どうやら白山のイワヒバリは、量が多く見つけやすく簡単に捕まえられる残雪上の昆虫のおかげで、人が用意した餌にはあまり関心を示さなかったと考えられます。

高山植物の多くがまだ新芽を出しておらず、高山帯で発生する昆虫が少ないと考えられる6月に、7月よりはるかに多くの昆虫が雪の上にいることは注目に値します。この時期、上昇気流によって運ばれてきた昆虫が、イワヒバリだけでなく高山の生き物の重要な食べ物となっているに違いありません。

残雪が少なくなり、高山植物が花を咲かせる7月下旬から8月になると、イワヒバリの生息地でもたくさんの昆虫が発生します。この時期になると雪の上の他に、背のごく低い植物が生えている場所でもよく食べ物を探しています。イワツメクサやイワギキョウの咲く砂礫地や、ガンコウラン、チングルマなどの風衝群落、アオノツガザクラやミヤマキンバイなどの雪田植物群落がそれです。それらの場所で、草の中に跳び込んで昆虫を捕まえている姿を見かけます。



雪溪上の50cm×50cmの範囲に見つかった全昆虫
(白山、6月) <N>



雪溪の上や雪の消えた砂礫地が採食地となる (6月)



イワツメクサやイワギキョウの咲く中で昆虫をつかまえた親鳥。
この後、巣の雛へ運んでいった

営 巢 場 所

イワヒバリの巣は植物の葉や茎、根などで作られたお椀形です。今までに見つかっているのは、すべて御前峰、剣ヶ峰、大汝峰で囲まれた山頂部の岩礫地や岩場で、大きな岩の裂け目や岩と地面の間のくぼみ、神社の石積みの隙間などに見つかっています。人の手の届かない高い位置だけでなく、地上やごく低い位置にもたくさんありました。また多くは歩道から少し離れたところでしたが、歩道のすぐ横に見つかったものもありました。分かっているものだけで15か所以上になります。



山頂部の岩礫地には方々に巣が見つかる



巢のある岩礫地



岩の穴の古巢



岩と地面の間の巢

繁殖期の生息環境と個体数

生息環境

繁殖期にイワヒバリが白山の山頂付近に群れてナワバリを作り、また巣を作っていることを述べましたが、山頂付近だけでなくそこから直線で約5km離れた別山や、そこへ至る尾根沿いなどにも毎年見つかっています。そこで繁殖期にイワヒバリが記録された場所の環境を調べると、大きく2つに分けることができます。

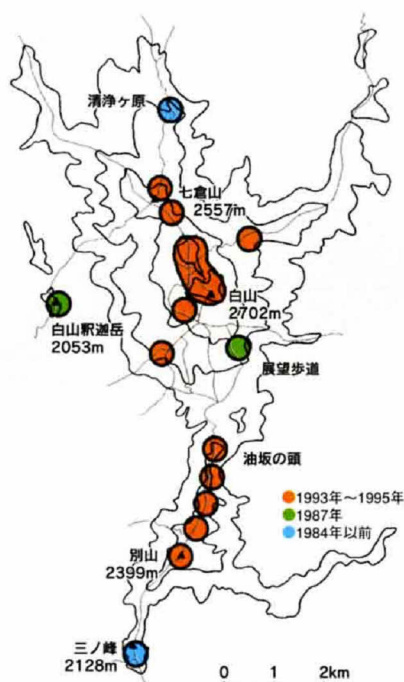
一つは山頂付近の岩礫地や雪渓、風衝地、雪田植生などがあるところです。そこは背のごく低い植物がところどころ生えているだけで、ほとんどが岩や礫、砂からできているところで、平坦地も比較的多くあります。標高は概ね2500m以上で、いわゆる高山帯に属します。もう一つは油坂の頭から別山にかけての尾根の東側のように、岩や土砂の崖地の多い急斜面で、平坦地は少なく、遅くまで残る雪渓があるところです。周辺には高茎草原や低木林が広がり、一部にはダケカンバやオオシラビソの高木林もあります。標高は2100～2400mくらいのもので、大部分が亜高山帯に属します。

今まで、イワヒバリの生息環境としては、前者のような高山帯の環境が一般的とされてきました。しかし白山では、後者のような環境にも広く分布していることが分かりました。おそらく雪の多いことが、地形や植生に影響し、営巣環境だけでなく採食環境も作り出し、イワヒバリが高山帯だけでなく亜高山帯にまで分布を広げることになったものと思われます。

山頂付近には群れが重なり合って分布しているのに対して、他の場所では点在して分布しているところをみると、イワヒバリには山頂部のような高山帯の環境が本来の繁殖地の環境と考えられます。



油坂の頭から別山への稜線沿いのイワヒバリ生息地



白山における繁殖期のイワヒバリの分布（6月中旬～7月下旬）
太線は標高2000m以上200mごとの等高線、細線は登山道

生息個体数

個体識別したイワヒバリの行動追跡などにより、1993年～1995年に山頂付近に6群、少なくとも38羽の成鳥が、またこれ以外のところでは10か所28羽の成鳥が見つかりました。合計すると少なくとも66羽の成鳥がいたことになります。そして1987年には上記とは重複しない別の2か所（白山釈迦岳、展望歩道）に見つかり、他にも1984年以前に記録のあるところ（三ノ峰、清浄ヶ原付近）があり、また調査困難な場所で生息可能な環境もあることから、数は増えると考えられます。しかし、白山という一つの山域に生息する小型鳥類の数としては決して多い数ではありません。

イワヒバリの保護のために

イワヒバリを観察しよう

白山の山頂付近に限らずいわゆる高山帯は、岩場や砂礫地、背の低い林や草原が広がっており、景観的に見通しがよい場所です。そこで少し注意を払えば、イワヒバリやカヤクグリなどの鳥を見つけるのも簡単です。また夏山の登山シーズンが、これらの鳥の繁殖期とも重なっており、よくさえずったり目立つ行動をとることも発見を容易にしてくれます。

山頂の御前峰、大汝峰、剣ヶ峰に囲まれた範囲は、イワヒバリが全域に生息しており数も比較的多いところですが、耳をすませて、そのよく通る鳴き声をさがしたり、雪渓の上をくまなく見ていくときっと見つかるでしょう。あまり人を恐れない鳥ですが、近づきすぎないようにして、ゆっくり観察してみましよう。一羽と思っていたら数羽の群れで行動していたり、捕まえた昆虫を巣立ったばかりの雛に与えているところを見つけることができると思います。

注意したいこと

イワヒバリの巣のいくつかは、山頂付近の多くの登山者が利用する歩道のすぐ近くにありました。そのようなところになぜ作ってしまったかを考えると、おそらくイワヒバリが巣を作る6月ころは登山者は少なく、近くに人が来ることはほとんどないので、気にせずに作ったものと思われます。そして幸いなことに、抱卵や育雛の時期も、梅雨の最中で登山者は多くありません。たとえ近くに来ても、雨や霧のため視界が悪く、人に見つかることはほとんどないのでしょう。

このように人による影響は比較的小さいと思われませんが、巣立った雛を育てたり2回目の繁殖を行う時期は、登山者が非常に多くなる7月下旬から8月にあたることから、何らかの影響があると思われます。他の鳥に比べて人をあまり恐れないイワヒバリでも、巣のすぐ横を人が頻繁に通れば親鳥は迷惑に違いありません。また登山道や人の踏み跡は、イワヒバリの天敵にあたるオコジョや

キツネなどがよく利用します。私たち登山者は、少なくともきめられた歩道を外れないようにし、巣に近づいたり、天敵を巣へ誘導させることのないようにしなければなりません。特に残雪の多い5月～7月上旬や、それ以降でも残雪の多い場所では、雪の上を自由に歩き回ったり、歩道のルートがはっきりしなくなって、知らず知らずに巣に近づいていることがあるので注意が必要です。

高山帯の生き物の保護

イワヒバリは高山帯を中心に繁殖する鳥の一つです。高山帯を有する山としては白山は日本列島の西の端にあたります。そこでイワヒバリの繁殖地も白山より西方にはなく、また日本での分布の中心地である北アルプスや乗鞍岳などからは、はるかに離れた位置に孤立した存在です。しかも条件のよい高山帯の環境は白山ではごく限られています。このように孤立した場所に分布したり、狭い範囲に生息が限られている生き物は、絶滅の恐れの高いことが分かっています。白山の高山帯の生き物は、条件のたいへん厳しいところに何とか生活しているのです。同じ環境に昔はいたライチョウが絶滅してしまったことを考えると、イワヒバリを初めとする他の生き物もその可能性があるのです。今ある高山帯の自然をこれ以上荒らさないことと、たとえば本来の歩道とは違うところにできてしまっている踏み跡など、今までに人が利用することによって傷ついた自然の復元をはかるなどして、本来の自然を保っていかねばなりません。

次にイワヒバリの秋から冬の生息地が、白山の中腹の数か所で見つかっています。またブナ帯や亜高山帯から吹き上げられてきた大量の昆虫が、ある時期の重要な食べものとなっていることも分かりました。これら昆虫はカヤクグリも食べていますし、高山の他の生き物の食べ物ともなっていると思われます。高山帯の生き物の保護には、高山帯や亜高山帯の生息環境だけを守っていても十分とはいえません。低山を含めた山域全体の自然を保つことが必要なのです。



乗鞍岳から望む白山。白山は日本列島西限の高山

おわりに

白山との比較のため、イワヒバリの研究が進んでいる乗鞍岳へ行ってみました。乗鞍岳は白山の頂上と同じ標高2700mまで車で一気に上がれます。そこには大きな駐車場があり、宿泊施設や売店、食堂などが建ち並び、たくさんの観光客でにぎわっていました。その周りで餌を探したり、建物の隙間に巣を作っているイワヒバリを見ていると、人が与えた餌にすぐに餌付いたことが納得できました。乗鞍岳のイワヒバリは、観光道路ができて以来長年にわたって多くの人と接し、また人の出すゴミの中から餌を見つけることにも慣れてきたものと思われます。それに比べると白山のイワヒバリは、より本来の自然な姿を保ち続けていると考えられます。

乗鞍岳から望むと、白山は低い山並みのはるか彼方にそびえていました。白山は日本列島の西限の高山であり、高山帯の面積はごくわずかしかなりません。イワヒバリに限らず高山にすむ動植物にとっては、仲間のすむ山から遠く離れ、しかもすむ場所も狭く厳しい環境です。その自然を保つことはもちろんのこと、私たち登山者も彼らの生活に大なり小なり影響を与えていることを肝に銘じ、慎重に行動しなければならないと思います。

イワヒバリの調査ならびに結果の取りまとめに御協力いただき、また写真の提供を受けた上越教育大学の中村雅彦氏にお礼申し上げます。

文・構成 上馬 康生

写 真 中村 雅彦<N>・小川 弘司<O>・上馬 康生

白山の自然誌 17	発行日 平成9年3月26日
	発 行 石川県白山自然保護センター 石川県石川郡吉野谷村字木滑ヌ4
イワヒバリの生態	Tel. 07619-5-5321 Fax. 07619-5-5323
	印 刷 (株)橋本確文堂

